

熱闘！ 日光インカレ！

— 第 22 回日本学生オリエンテーリング選手権大会 —
男子・早稲田大学，女子・筑波大学，ともに記録的大差で優勝

2000 年 3 月 10 日-12 日 栃木県日光市・今市市

第 22 回日本学生オリエンテーリング選手権大会（インカレ）が、さる3月10～12日、栃木県日光市・今市市で行われた。個人戦は男子・高橋善徳（筑波4），女子・小林啓恵（東北3）がタフなコースを克服して優勝した。団体戦は男子では早稲田が11年ぶり5回目，女子では筑波が2年連続11回目の栄冠を手にした。両チームともに，2走以降は他を寄せつけず，リレー団体戦が始まって以来の記録的な大差での勝利となった。長い歴史を持つこの大会，今回のレースを盛り上げたのは，大会の誕生とほぼ同時に産声を上げた若い選手たちの熱き闘いだった。



個人戦 3/11 「日光霧降」



▲男子表彰式風景（左から篠原，高橋，小野田，安井，内山，紺野の各選手）

上位成績

男子 11,800m ↑ 490m 20ctrls

1	高橋 善徳	筑波 4	1:29:10
2	篠原 岳夫	筑波 4	1:30:52
3	小野田雄介	東北 4	1:31:22
4	安井 真人	早稲田 3	1:33:09
5	内山 裕史	東京 4	1:33:12
6	紺野 俊介	早稲田 3	1:33:21

女子 7,800m ↑ 240m 13ctrls

1	小林 啓恵	東北 3	1:08:32
2	上松佐知子	筑波 3	1:11:52
3	塩田 美佐	筑波 3	1:15:50
4	番場 洋子	京都 2	1:16:30
5	近藤 寛子	国際基督教 4	1:25:00
6	深沢 博子	東京農工 4	1:26:31

トレイン&コース

第 14 回使用地図「日光所野」，第 18 回使用地図「所野 1.1」のリメイク。第 14 回の団体戦で使用された場所が今回の個人戦の舞台に選ばれた。旧地図に比べると若干北西部に拡張されており，その西端を選手権スタートに使用。個人戦としては珍しく，会場脇を通過するビジュアル区間も設けられた。また，以前団体戦で使われた比較的フラットな部分を一般クラスにも開放した。

選手権クラスの S→1 は，もはやインカレではお約束となっている尾根たどりロングレグ。ここで集中力とスピードを両立できるかが，その後のレースを左右すると思われる。タフな部分が前半に集中しており，インタビューによれば多くのメダリストに「自分は遅れている」と思わせた模様。それを反映してか，設定優勝タイム（女子 65 分，男子 80 分）に対して女子で 3 分半，男子で 9 分強上回る結果となった。



▲今回の見せ場・会場脇ビジュアル区間を走る選手

入賞者インタビュー（女子）

◆WE優勝：小林選手「これまで東北大の女子からインカレチャンプを出せなかったのは悔しかったけど、自分がなれて嬉しい。開会式のシード選手紹介で自分のスライドが写らなかったが、自分の顔を見られることがなかったので、それはそれで良かったんじゃないかと思っている。表彰台の一番上は気持ちいいけれど、予想していなかったことなのでまだ実感はない。明日の団体戦では、筑波の優勝を阻止します」

◆WE 2位：上松選手「今日は一発狙おうと思っていたけど、負けてしまった。来年は必ず啓恵ちゃんに勝ちたい。明日の団体戦ではもちろん勝ちます」

◆WE 3位：塩田選手「地元の栃木で表彰台に立てて光栄。同期の仲間と競い合えたおかげでここまで来られたと思っている。レースは落ち着いて自信を持ってオリエンテーリングをしようと思ってやった。ミスしたところ以外はそれなりにできたと自分では思っている」

◆WE 4位：番場選手「S→Iですごいミスをやってしまった。でもそこで吹っ切れて、今日やれるだけのことをやった。数値的な目標は考えないで、持っている力をすべて出せる精神状態に持っていくようにした」

◆WE 5位：近藤選手「（山本康世選手以来4年ぶりのICUからの入賞に）先輩には順位でかなわなかった。4位とは大差が付いているけれど、自分としては満足なレースができたと思う」

◆WE 6位：深沢選手「（角田明子選手以来15年ぶりの農工大からの入賞に）嬉しいですね。最後まであきらめないでやろうという気持ちでやったのが良かった」



▲女子表彰式風景（左から上松、小林、塩田、番場、近藤、深沢の各選手）

入賞者インタビュー（男子）

◆ME優勝：高橋選手「タフなコースだった。ウィニングよりも遅くなったけど、自分としてはいいペースでできた。他の選手は気にせず、淡々とレースをこなしていた。ビジュアルのとき順位を教えてくださいなかったのが不安に思ったけど、ちゃんと帰って来られるとは思っていなかったのが嬉しい」

◆ME 2位：篠原選手「誰にも追いつかず、誰にも追いつかれずという孤独なレースで、自分が速いのか遅いのか分からなかった。ウィニングの80分を越えそうなペースだったけど、レースの内容には満足している。これで負けたりしない、という感じだった」

◆ME 3位：小野田選手「卒論が忙しくて十分にトレーニング

していなかったのは事実だが、それを言い訳にはしなかった。全体的にスピードが出ないレースだった分、大きな差が付かなかったんだと思う。上の二人には勝てなかったが、明日は勝つ」

◆ME 4位：安井選手「走っているときはダメかと思っていたけど、結果的には良かった。個人戦には紺野に絶対に負けると思ったが、久しぶりに勝てたので嬉しい。明日が本番だと思って頑張る。優勝する」

◆ME 5位：内山選手「レースを乗り切るパワーが残っていなかった。足の故障があったが、走る前からそれを言い訳にしているところがあった」

◆ME 6位：紺野選手「（第一・第二中間がトップだったが、その後失速したことに関して）飛んだ。ミスった。16→17で現在地ロストを連発した。禁酒を4日していたが、3日でやめておけばよかった」



▲インタビューに答える男子チャンプ・高橋選手



▲男子選手権の序盤。大尾根を一回りするようなレッグが組まれており、かなりの忍耐を要求する。

団体戦 3/12 「日光口磐裂の霊水」



▲男子優勝・早稲田のウィニングラン

上位成績

男子 7,800-8,100m ↑ 345-395m

- 1 早稲田 4:07:28 (西村—安井—紺野—清水)
- 2 東京 4:20:25 (加藤—内山—西脇—上野)
- 3 筑波 4:21:41 (谷野—高橋—篠原—吉村)
- 4 京都 4:43:39 (深川—許田—西村—田之村)
- 5 東北 4:47:57 (田村—八巻—金澤—小野田)
- 6 千葉 4:50:11 (中村—緒方—梅原—吉川)

女子 4,900-5,400m ↑ 150-180m

- 1 筑波 2:20:39 (塩田—上松—伊藤)
- 2 東北 2:42:58 (下村—池田—小林)
- 3 日本女子 2:58:23 (長田—酒井—葛城)
- 4 京都橘女子 3:01:04 (上田—横江—北山)
- 5 図書館情報 3:08:37 (横室—加藤—山田)
- 6 慶應義塾 3:11:08 (山根—岡田—高橋)

テレイン&コース

第7回インカレで最初のリレー団体戦の舞台となり、以来多くの学生オリエンティアに親しまれた「七里」が、地図名も新たに久しぶりに帰ってきた。道や尾根はフラットな部分が多くスピードが出やすいが、ところどころに川を横切る場所、傾斜のきつい場所があり、ルートチョイスがタイムに影響する可能性が高い。まさに団体戦向きのテレインと言える。地図北西端の七里小学校を会場とし、テレイン中央部をクロスしながら南東端まで行って戻ってくるのが男子選手権コース、中盤で折り返すのが女子選手権コースになっている。

戦前予想

男子に関しては、上位4人が個人戦できっちりとタイムをまとめた早稲田が本命。対抗に高橋・篠原の2枚看板を擁する筑波と、層の厚さで勝負する東北。これに東京・京都を含めた5校が、優勝戦線に絡むものと思われた。そこからやや離れて北海道・新潟・慶應義塾・東京工業の4校が第2グループとして入賞のイスを争う。近年は入賞ラインでの攻防が非常に激しく、最後の最後まで息をつかせないレース展開になるだろう。

女子はシード選手3人を揃えた筑波が大本命、対抗にチ

ャンプ小林を擁する東北。三番手以降は混戦模様で、どこが来てもおかしくないと見られていた。関東では慶應義塾・日本女子・図書館情報、関西では京都橘女子・京都・京都女子に注目。



▲女子選手権・スタート風景

レース展開 (女子)

優勝候補筆頭の筑波は1走に前日個人戦3位の塩田、対する東北は個人戦12位の下村を置いてのスタート。第一中間では東北がかろうじて筑波を抑えてトップ通過。しかし第二中間で逆転されると、以後は両者の差が広がる一方で、2走へのタッチ時点ではその差は約4分に。以後、新潟・京都橘女子・日本女子・相模女子という順でリレー。慶應義塾はトップから15分遅れの8位、図書館情報は18分遅れの10位。

2走は筑波が前日準優勝の上松、東北は前日9位の池田。差はさらに広がって3走タッチ時点で12分まで広がる。東北は筑波を追うどころか、後を追う新潟・増山に3分差でびたりと付かれる。

3走は前日の失格で涙を飲んだ筑波・伊藤、対する東北はチャンプ小林というエース対決となるが、前日のうっぶんを晴らすかのような伊藤の走りの前に東北はなす術もなく、最終的には2位の東北に22分という記録的な大差での優勝となった（これまでの最高は第18回大会で筑波が出した16分差）。3位に付けていた新潟は3走の第一中間までに失速し、後続に隙を突かれた格好。新潟以外の上位校は3走を無難な走りでごなし、スライドするような形で順位を上げて続々とゴールした。



▲圧倒的大差で優勝の筑波。胴上げは1走の塩田選手

5位の図書館情報は第7回大会での3位以来15年ぶりの入賞、6位の慶應義塾は女子としては初の入賞。筑波が圧倒的な力を発揮する中、新しい力が続々と育っていることを伺わせる。この中から筑波を脅かす存在は出てくるのか、非常に興味深い。

レース展開（男子）

応援が響く中、選手が一斉にスタート。

1走は差のつきにくい腹の探り合い。この中で第一中間をトップ通過したのは東京農工大学の田崎。それを東京・北海道・京都・東北などの有力校が後を追う展開。西村のコールがさえずる早稲田陣営。しかし第二中間では東京農業に続く2位通過で、運営側の連絡ミスとわかり胸をなで下ろす一幕も。

逆に本当にミスになってしまったのが東北だった。いつまで経っても1走・田村のコールがされない。その間にほとんどの大学がコールされていく。結局東北が2走にリレーした時間には、早稲田の2走はすでに第一中間を通過したあとという大幅な遅れ。以降長い間、速報ボードから東北の二文字は消えたままになった。

2走は早稲田・安井、東京・内山、筑波・高橋という各大学のエースを投入する激戦区。特に1走終了時点でトップ早稲田から1分半という好位置につけた東京は終始早稲田に食い下がるレースを展開。この3校がほとんどタイム差を変えることなく3走にタッチする。その一方で残りのチームとの差が一気に開き、2走終了時点で3位・筑波と京都・千葉のタイム差は12分近くに。残りの走者を考えても、優勝争いはこの3校に絞られてきた。京都・千葉に続いて、東京工業・新潟・慶應義塾と、入賞争いが予想された面々が続々とタッチ。



▲タッチ後、オフィシャルの虎谷氏とともに速報ボードを見つめる早稲田2走・安井選手

優勝争いのクライマックスは3走で起きた。前日の個人戦で6位に終わった早稲田・紺野はこの日に会心のレース運びを見せ、第二中間までに東京・西脇に約13分の差を付け独走態勢に。遅れを取った東京は後続の筑波に追いつかれ、ここからしばらく両者のもつれ合いになる。千葉3走・梅原は若干失速し、京都に先行を許す。千葉はさらに新潟・東京工業・慶應義塾にも抜かれ、これらの大学陣営が速報ボードの前で喚声を上げる。

東京はアンカーに温存したシード選手・上野を投入して最後の願いを託す。しかしほとんど差は詰まることが無く、最終的には早稲田が完全優勝。女子の筑波同様、インカレ団体戦史上の最高タイム差というおまけつきであった。東

京2位、筑波3位。京都は4走タッチ時点のまま、他の大学と絡むことなく4位でフィニッシュ。



▲この悔しさは忘れない・準優勝・東京のメンバー

あっさり決着した優勝争いを尻目にデッドヒートとなったのが入賞争い。ほぼ同時にタッチを受けた新潟・大久保、東京工業・山根、慶應義塾・高橋の3人だが、揃って第一〜第二中間で失速してしまう。後から猛烈な追い上げを見せたのが、しばらく速報版に名前すら出ていなかった東北であった。

3走では JWOC 代表にも選ばれた金澤がしっかりお膳立てし、4走はエースの小野田。4走中で最速のタイムをたたき出し、第二中間以降という土壇場で東京工業・千葉を抜き去る。東北は滑り込みで5位をゲット。ゴールしたとき、小野田はガッツポーズをしていた。



▲会心の走りで入賞圏復活、東北・小野田選手

入賞の最後のイスに座った千葉は、入賞大学中唯一、個人戦で一般クラスを走ったメンバーを含んでいた。本人たちは「できすぎ」と謙遜するが、メンバーのうち一人も脱落者を出さず、堅実につないできたことが入賞につながったと言える。

終わってみれば、波乱はあったものの、表彰台に登ったのはいわゆる常連校ばかりになった。序盤では東京農工の快走、中盤では新潟の踏ん張りがあった。特に4走第二中間まで夢をつなぎながら東北の前に夢破れた東京工業は、3年前・奈良の7位、前回・山口での8位に続き、今回も近くて遠い表彰台となった。夢を現実に変えるための長くて短い1年間の旅が、また始まろうとしている。

入賞校インタビュー（女子）

◆WE優勝：筑波大学「（塩田選手）レースは、自分が1走で、あとに二人がいたので、ゆっくり落ち着いてできた。今日まで支えてくれた仲間、OB、オフィシャルの方々に感謝したい」「（伊藤選手）前の二人がいい走りをしてくれたのでよかった。攻めのレースをして、満足のいくレースができた。（自分はいなくなってしまうが）残りの二人なら心配することはない。これからまた1年間、愛好会のみんなで頑張りたい」

◆WE 2位：東北大学「（3人とも3年生で、来年も残ることに関して）来年もいい勝負ができるように準備していきたい」

◆WE 3位：日本女子大学「来年はさらにジャンプできるように頑張りたい」

◆WE 4位：京都橘女子大学「（昨年2位、3年連続表彰台ということに関して）強い先輩方が抜けたのでいろいろ言われた。そんな中で表彰台につくことができて、すごく嬉しい」

◆WE 5位：図書館情報大学「（久々の入賞に関して）チームのみんなといろいろ話し合ってきた結果だと思う。本当に嬉しい」

◆WE 6位：慶應義塾大学「（山根選手）ラスト前でミスってどうなるかと思ったけれど、自分が走り終わった後は後輩を信じて待っていた。2年前に『2年後には表彰台に立つ』という目標を立てて臨んできたけれど、そのときの目標を達成できた」



▲女子表彰式風景（上段左から東北、筑波、日本女子、下段左から京都橘女子、図書館情報、慶應義塾）

入賞校インタビュー（男子）



▲男子表彰式風景（上段左から東京、早稲田、筑波、下段左から京都、東北、千葉）

◆ME優勝：早稲田大学「これまでいろんなことがあったが、奈良インカレ以来11年ぶりの優勝ということで嬉しい。来年も油断しないように頑張りたい」「（清水選手）兼田、榎本など、走りたくて走れなかった人のためにも、優勝できて良かった。これもOCのみんなやOB/OGのおかげだと思う。来年は残ったメンバーで連覇してくれと思う」

◆ME 2位：東京大学「（内山選手）インカレは魔法使いのようなものだ。確かに脚は痛かったけど、みんながゴールで待っていると思うとやる気が出てきた。（早稲田2走の）安井に迫りつづけたと思ったが無理だった」

「（上野選手）自分の走りは出来たと思う。結果として勝つことはできなかったが、東大のイメージ通りの走りができたと思っている」

◆ME 3位：筑波大学「いいレースができたと思う。差があって、追いかけるだけの展開だったので心理的には楽だった。」「（篠原選手）東大に追いつけばいいかな、と思って走っていたら追いつけた。自分たちが抜ける来年は正直言って苦しいが、OBの指導に応えてくれれば、結果はともかくとして満足できると思う」

◆ME 4位：京都大学「（許田選手、エース区間の2走を担当したことで）山の中では他の大学のランナーには会わなかった。足をねんざしてしまい大変だったが、3番ポストあたりから走れるようになった。怪我のわりには上出来だった」

◆ME 5位：東北大学「（小野田選手、4走でゴボウ抜き
の5位ゲットに関して）序盤で出遅れたけど、気分を切り
替えた。メンバーに入れなかった人たちの努力を形に残し
たくて走った。（自分は卒業でいなくなるが）後輩たちは
来年やってくれと信じている」

◆ME 6位：千葉大学「（個人戦エリート以外をメンバー
に含んでの入賞に関して）結果はでき過ぎだと思う。オフ
ィシャルの（坂口）志功さんに感謝したい」

グラフで見る団体戦分析

下図は、男子団体戦における上位校のタイム差変動を表
したものである。縦軸には上位6校の平均時間を基準とし
た時間差（分）を表した。早稲田3走・紺野、筑波3走・
篠原、東北4走・小野田の場所が右上がりになっており、
それぞれの順位の立役者になっていることがわかる。

有力校の走順戦略、とりわけ「どこにエースを置くか」
は、その大学の描くレースのシナリオを表す。今回の場合、
2・4走の東京、2・3走の早稲田と筑波、3・4走の東
北と分かれたが、結果的に配置がそのまま最終成績に結び
ついた感がある。2走で他大学を出し抜き、その上で残っ
た相手との3・4走勝負が優勝争いの条件だろう。シナリ
オの狂いがあったとすれば、筑波・東北の1走が出遅れた
ことだろうか。筑波は2走エースで射程圏内に駒を戻した
が、東北は1走の遅れが予想外に大きく、最後まで忍耐の
時間を過ごしたに違いない。

グラフから明らかなように、5位以下の入賞争いは4走
で大混戦となった。2走以降、千葉・北海道・東京工業・
慶應義塾・新潟などがひしめき、そこに遅れて東北が割っ
て入った格好になっている。注目すべき点は、これらのチ
ームから致命的な失敗をした選手がいなかったことだろ
う。その結果、東北を除いては、各大学が目標とそう遠く
ない順位に収まった。

計算できるレースができることで、駆け引きやメンタル
的要素が意味を持ってくる。これが入賞争いできる大学の

条件と思われる。このレベルで争う大学は、秒差の争いを
想定し、4走にそのようなプレッシャーを受け止められる
選手を使えることが理想だろう。

しかし、一方で「リレーは水もの」とも言われる。いく
ら前評判で優勝候補と言われていても、ちょっとしたミス
でその展開は大きく狂う。特に近年は有力選手の大爆発や、
地図取り違いなどによる失格が散見された。その中で、実
力通りの結果を本番で発揮した早稲田男子、筑波女子は、
素直に素晴らしいと思う。

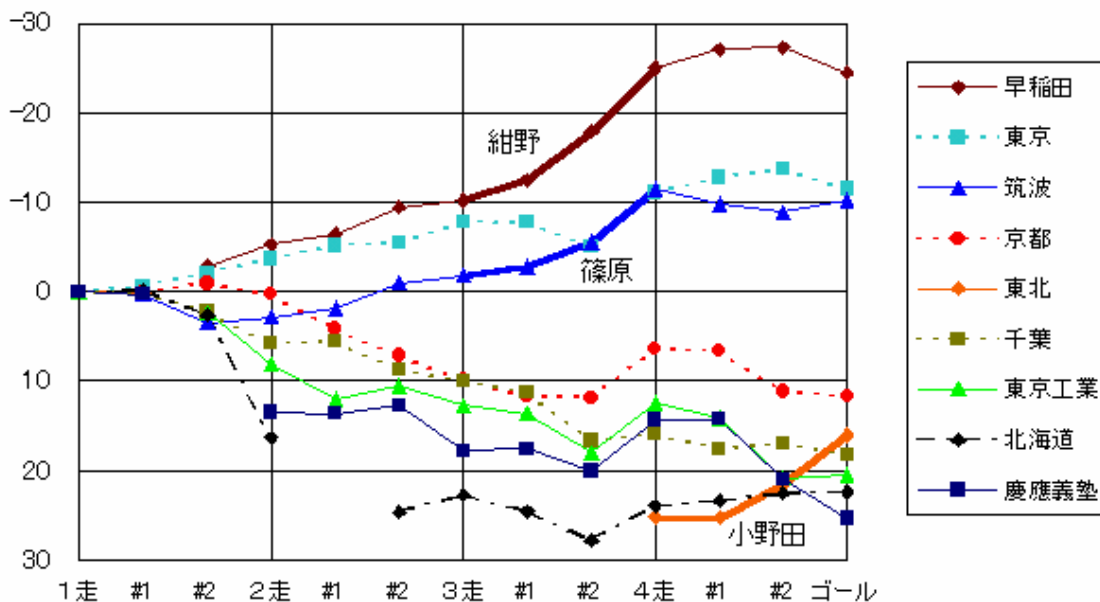
* * *

インカレのリレーを参加者の視点で見るとは5年前の
静岡インカレ以来だった。久しぶりに見る熱の入った応援、
速報ボード前の興奮、喜びあり・涙ありの光景は、見る者
にパワーを与えてくれる。久しぶりにオリエンテーリング
で感動を味わった。



▲団体戦の舞台、男子選手権のコースの一部。

Text&Photo：佐々木順（94 東京卒）



付録：男子団体戦における上位校の順位変動の様子